

# 個々の関心をつないで創る探求活動

——ジグソーパズルの展開による「箸の研究」を例にして——

櫻 本 明 美

## 1 探求活動の総合学習化に向けて

本研究は、大学における授業の活性化と充実をめざした試みの一つとして、総合学習の実践例を提示し、そのような実践の意義について考察するものである。(なお、ここでいう「総合学習」は、「総合的な学習」「総合的学習」と同義のものとし、以下、この語を用いる。)

教育の課題である「学習者主体の授業」を拓いていくには、大学の授業においても総合学習につなげる発想が有効性をもつと考えられる。このことを検証するには、現状では理論面を踏まえつつ、実践面からのアプローチがもっと必要ではないかと考える。

周知のとおり、2002年度(平成14年度)からの新学習指導要領の完全実施に伴い、「総合的な学習の時間」が時間割に組み込まれるようになった。この学習指導に関しては、特に小学校で様々な工夫され、それらの実践が研究会や刊行物などを通して報告されたりもしている。総合学習の学校教育への導入については1996年(平成8年)の第15期中央教育審議会第一次答申に端を発している。いち早く試行的な実践に着手したのは小学校であるが、まだ日が浅い。したがって、小学校段階においてですら、総合学習の実践そのものの集積が少ないというのが現状である。

この動向を見据え、本学では、平成13年度から、「総合学習の研究」(児童教育学科3・4年次生対象)「総合演習」(2年次生対象)の科目を設け、授業展開が試みられている。このうち、「総合学

習の研究」の目的は、総じて言えば、「総合的な学習」に関する背景、位置づけ、目標、内容などについて理解を深め、具体的にどのように進めていけばよいのかということを見つけていくことにある。言うまでもなく、とりわけ小学校の教員をめざしている者にとって、総合学習に関する知識理解は、必要不可欠である。ただ、算数科や国語科などと違い、自分たち自身が学習体験を持たない内容の学習を仮定的に構想するのは、そう簡単ではない。そこで、総合学習のテーマについて学び、自らも問題を設定し、その問題解決に取り組むという活動を授業に組み込んでいる。しかし、開講してからの日が浅い。それゆえ、学習者及び授業担当者が相互に、さらに学びあう必要があると考える。

そこで、その学びあいをまずは「総合学習的展開を意図した一つの実践を報告する」という形での問いかけから始めてみようと考えた。具体的には、総合学習が備えるべき次の要件に照らし、その学びの構成や学習そのものの有効性を問うことになる。

〈総合学習の要件〉として措定した事項<sup>1)</sup>

- ア 学習課題は学習者の「日常生活」「地域生活」「社会生活」の中からのものであること
- イ 人や自然などと積極的にかかわるプロセスを大切にし、体験的活動を取り入れること
- ウ 「学びの継続」が期待できること

要するに、指導者と学習者が共に創る学習を構想し授業を実施した結果、そこでの探求活動を通して発見し生み出すことができたものは何か。この問いに対する答えを明確にすることによって、本研究の課題に迫ろうとするものである。

大学生にもなると、一人一人が自分の得意とする（もしくは興味・関心のある）分野をもつようになっている。授業の構成メンバーは、そういう人の集まりである。したがって、授業を進めるにあたって、それをできるだけ有効に生かすようにしたいものと、常々考えてきた。その具体的方策の一つが総合学習ではないかと思い至り、プロジェクト研究として、その実践を試みたわけである。この実践に考察を加えることは、学習者の充実感と学習力に資する授業のあり方を問うことになる。

以上の考えに立ち、教育専攻科の授業「教科教育特別演習」で授業を計画し実践したものを詳しく例示し、その実際に基づいて考察するという方法で進める。

## 2 課題追求のテーマ設定について

「教科専攻特別演習（Ⅰ）（Ⅱ）」は、教育専攻科に開講している科目である。この科目は、主に専攻科修了論文を書き上げるという目的をもって私のゼミを選んだ専攻科生が受講する。本論文で取り上げる実践は、平成13年度生（5名）で組んだものである。受講生は、T・I・O・N・Mの5名である。（Ⅰ）は春学期、（Ⅱ）は秋学期で共に金曜日の1時間が配当されている。2科目を通して1年間、修了論文の指導などにも充てることになっている。

この5名は、必ずしも国語教育に強く関心を寄せているというわけではない。また、全員が小学校教員をめざすというわけでもなかった。学部生のときの所属も、3名が国文学科、2名が児童教育学科である。論文の研究テーマも、4月当初から、それぞれに自分の関心に沿ったものを設定していた。それぞれのプロフィールを簡単に記すと、次のようである。

T…紙芝居に関心をもっている。歴史的に文化を捉えていく見方に個性がうかがえる。事務的なことを上手に処理する。

I…情報機器に詳しくコンピュータをよく使いこなす。また、4年次生のころ、放送局の

アルバイトも経験している。

O…大学4年間、ソフトボール部で活躍し、専攻科でも続けている。そういうこともあって、人間の身体のしくみや機能に関心が強い。

N…総合的な学習に関心をもっている。小学校の教員をめざしている。

M…音楽に堪能で、しかも運動がとても好きである。小学校教員をめざして、模擬授業などにも積極的に取り組んでいる。

このように、個性の豊かな5名が共に学ぶ場として、できるだけ有意義な時間としたい。それぞれに自分の角度から共通のテーマを追求し、それを交流する過程で、これからの教育を考えるうえでのヒントとなり得るような発見を生み出していくことができるのではないかと考えた。つまり、よくとられる形態としての小グループ学習で、異質性が生きるといいう方向でテーマに迫る方法をとることにしたのである。なお、このように追求の過程で、明らかにできた一つ一つを単に並べるのではなく、さらに組み合わせ、そこに新たなものを見つけようとする方法を、ジグソーパズルになぞらえて「ジグソーパズルの展開」と名づけてみた。

さて、テーマの設定にあたっては、先に示した要件を念頭におきながら、各自の興味、関心をもとにした案を出し合い、その中から話し合って選ぶことにした。具体的な物を取り上げることが取り組みやすいのではないかとということと、子育てに何らかのつながりをもつものという考えから、「箸」をテーマと決めた。

そして、限られた時間の中で一区切りをつけるという見通しに立ち、「箸」のもつ様々な側面からそれぞれに自分の関心にそったものを選び資料提供などを分担することになった。

言うまでもなく、生活様式が変化しても、依然として箸は、私たちの日常生活における必需品の一つである。また、箸にちなんだ慣用句には「箸が転んでも笑う」「箸が進む」「箸にも棒にもかからない」「箸の上げ下ろし」など、現在も使われ

続けているものがあり、ことばの面から追求することも一案である。しかし、ことばに絞るよりもフィールドを広げて取り組んでいく中から、そうしたことばの教育に関する問題にも言及できるのではないかという見通しのもとに、まず、箸に関する各自の既有知識を出し合った。そのうえで、おおよそ、次のような角度をもって、問題追求に当たっていかうということを申し合わせた。

- a 箸の素材
- b 箸の製法
- c 箸と手
- d 箸とマナー

なお、指導者は、このメンバーの一員としても加わり、「文学作品における箸」を担当することにした。この項目を加えることで箸のもつ何らかの象徴性がつかめるのではないかと考えたからである。

### 3 「箸プロジェクト研究」の実際

#### (1) 課題追求活動の進め方

個々の修了論文指導と同時進行のため、週1回の授業(90分間)の40分間をこの活動に充てる。毎回、担当者が資料を準備する。それをもとに情報や意見を交流し、次回につなげるという進め方をとる。また、c、dに関しては、アンケートを実施してみるという方向性を視野に入れる。当年度内で本研究に一応の区切りをつけるために、資料を共同で作成し、教育専攻科の論文発表会(2月上旬に実施予定)で報告することを確認しあった。そして、時間的な目途を立てたうえで、このプロジェクト研究に着手することになった。

#### (2) 各項目についての追求過程で明らかにしてきたこと

追求過程の詳細については別の機会に譲るとして、ここでは、メンバーの「箸」についての認識に拡充が認められた過程に焦点をしばって、その内容を具体的に述べる。

#### ① 追求の端緒を開く

一詩の鑑賞を中心に—

まず、箸のもつ意味を探り、追求の端緒とすべく、指導者の側から石垣りんの作品「鬼の食事」<sup>2)</sup>を提示した。

#### 鬼の食事

石垣 りん

泣いていた者も目をあげた。  
泣かないでいた者も目を据えた。

ひらかれた扉の奥で  
火は  
矩形にしなだれ落ちる  
一瞬の花火だった。

行年四十三才  
男子。

お待たせいたしました、  
と言った。

火の消えた暗闇の奥から  
おんぼうが出てきて  
火照る白い骨をひろげた。

たしかにみんな、  
待っていたのだ。

会葬者は物を食う手つきで、  
箸を取り上げた。

礼装していなければ  
恰好のつくことではなかった。

この作品の「会葬者は物を食う手つきで / 箸を取り上げた」に着目して読んだ。「火照る白い骨」を箸を使って「物を食う手つき」で拾うとみた詩人の見方に、これまで何気なく使ってきた箸に潜む意味への興味が強く刺激されることになっ

た。

このようにして、箸の語源や意味を確認することの必要性を実感するに至った。

調べた結果をもとに定義づけるとすれば、「箸は、あちらとこちらをつなぐもの」と言える。因みに、この詩では死者のお骨を拾うための箸について、お骨を「箸から箸へ」渡すという動作も加味して、この世から黄泉の国へと送り届けるための「橋渡し」の意味が込められていると解釈できる。つまり、「箸」は「橋」に通じるのだということである。

この最初の段階における「箸」の意味付けによって、「つなぐ」という共通のキーワードが、おぼろげながら見えてきた。そこで、「箸はつなぐもの」と意味を措定した。

## ② 文献やインターネットの活用等による情報検索

漢和辞典（角川漢和中辞典）で「箸」の解字をみると「飯を叉取する竹、はしの意」とあり、竹が素材として用いられていたことが分かる。しかし、現在は、様々な素材が使われていることに着目し、このことについて、もっと詳しく知っておきたいと考えた。これは、「木材利用と環境問題」にからむ事柄でもあることから、「箸」のもつ一面を追求する糸口になると考えたからである。この点について、Tから、次のような内容の報告があった。その内容をかいつまんで以下に示す。

箸の素材には、杉のほかに、ヒノキ、松、白樺、竹、ヤナギ、南天などのよく知られたものだけでなく、黒檀、紫檀、花梨、ゆず、楓、ブナ、桑なども用いられているということである。また、この他に、象牙もある。金属も用いられていて、金、銀、アルミなどのものがある。さらに、今日では、合成樹脂のものも多用されている。

木の場合、各素材が使われるようになったのには、それぞれに理由がある。入手が難しくなく、木の肌がなめらかで感触がよいこと。強度も強いということなどである。

また、このときの報告では、一般によく使われ

ている竹や杉などの素材が強い殺菌力を持つということにも触れている。このような報告を受けて、箸の素材の多様さを知ることができた。

さらに、情報収集は「割り箸」の歴史にも分け入った。発表用に作成した資料には、次のように記している。

日本一の酒どころ「灘の酒」が急速に発展を遂げたのは、江戸時代も後半のこと。灘酒は吉野杉から作られた酒樽に詰められ、次々に最大消費地である江戸へ運ばれた。

運搬中、ほんのりと灘の杉の香がついた酒は、いっそうの美酒となり、当時の江戸っ子たちにたいへん喜ばれたとか…。そして、そんな酒樽の副産物として生まれたのが割り箸。当初は酒樽を作った後の余りの杉から、また使用済みで不要になった酒樽からのリサイクル製品として作られた。

これは、箸の歴史にも先人の物の見方や知恵が隠れていたのだということの証である。この他に、同じように箸を使うのであっても、中国や朝鮮はそれぞれに違った箸の文化をもっていることなどを知った。

割り箸に関しては、これまでも「使い捨て」の是非論があったことを想起し、また、新聞の関連記事<sup>3)</sup>を併せ読むなどして、意見交流につなげるようになった。

相互に持ち寄った文献等によるこれらの情報をもとにして気づいたことを出し合い、ひとまず集約して、次のようにまとめた。発表用に作成した資料のことばをそのまま次に引用して示す。

木の命を受け継いで「箸」をつくり、その「箸」で生き物の命をいただく。「箸」は、木や植物、動物の命と私たち人間を「つなぐ」ものである。

鳥は「嘴」で餌付けをする。ここにも、親鳥からひなへ命をつなぐ活動が行われていると同時に、他の命を嘴によってつないでいる。

上記から分かるように、当初おぼろげであった「つなぐ」が、「命をつなぐ」として、確かに意味付けられている。

### ③ 映像資料がもたらしたもの

資料収集にあたっては、インターネット情報の検索には一つの有効な方法である。しかし、テレビなどを通して接する映像の役割も見逃せない。

このプロジェクトで、映像資料に目を向けたのはIさんであった。そのIさんが自らの追求過程を振り返って、課題意識が深まっていったようすを次のように述べている。

#### 【Iによる考察】

最終的には「箸の製法」について、取り上げることにしたが、初めからこの角度に定めていたわけではない。

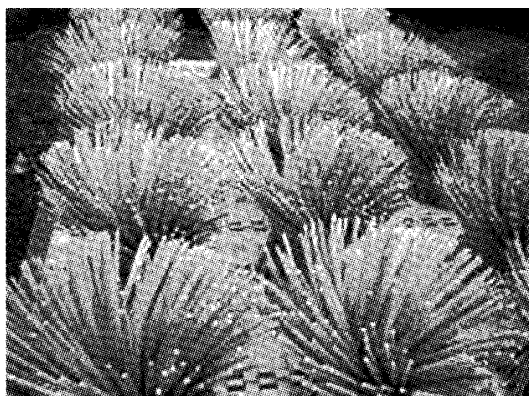
以前、テレビ番組で「My 箸」を使っているタレントを見た記憶があった。そこで、割り箸（使い捨て箸）ではなく「My 箸」を使うことには、何か視聴者へのメッセージが込められているのではないかと考えた。この点を明らかにするという目的で、まず、現在放映されている料理番組に対象をしばって「My 箸」が使われているかどうかに注意して見てみた。また、放送局に簡単な質問状を送った。しかし、両方とも、これという手ごたえを得られないままに日が過ぎていき、この方向からの追求は、断念することにした。

とはいえ、この作業は無駄ではなかった。料理番組や食料品のコマーシャルなどに的をしばってみているうちに、「箸の色」が料理を引き立たせる効果をもっているということに気づいた。さらに、「箸の色」は、「箸の素材」とも関係することに気づいた。

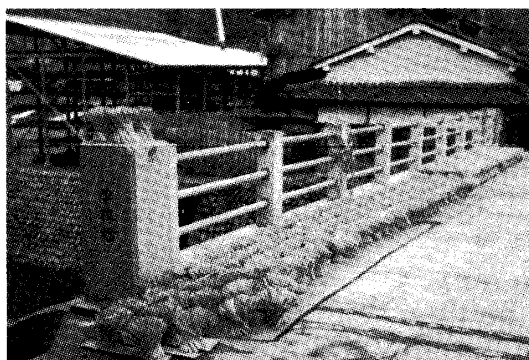
たとえば、冷やしそうめんのコマーシャルに使われていた箸は、青竹を素材としたものであった。白いそうめんに青い竹の色が映えて、涼しげで食欲をそそる映像となっていた。

こうした情報収集を続けているうちに、「割箸の製法」に関心が定まり、それを確かめる作業に進んだ。そこでは、「箸の花」という言葉との出会いがあった。これは、杉を素材とする割箸の製作過程で、50膳ほどの割箸が一つに束ねられ、花が開いたようにして

天日で乾されている様子を表現している。特に、「橋の端から端まで、箸の花が並べられている」写真には、目を奪われた。撮影者に、「はし」の掛詞が意識されていたのかどうかは定かではないが、ここに至って、私自身の中に、「はし」に対する興味、関心が確かに位置づいたものと実感した。<sup>4)</sup>



〈はしの花〉



〈橋の上に並べられた箸の花〉

### ④ アンケートの実施

様々な先行研究や情報に学ぶ一方で、現状の一端をとらえるために、アンケートによる調査も試みている。「c 箸と手」「d 箸とマナー」の2項目についてである。

#### ア 「箸と手」について

「c 箸と手」については、主に持ち方（使い方）に着目する。子どもの教育に関する問題として、「箸もまともに使えない」ということが言われて久しい。一例を挙げるとすれば、次のようである。

日本人ならできて当たり前というのが、箸を正しく使うこと。基本中の基本である。

成長過程のどこかで覚えるべきことが身に  
ついていない。大人になって、自分の持ち方  
が変だと気づいて直すこともしない。

… 中略 …

箸なんかどうでも、飯は食える！その通り、  
しかしね、物事にはたいてい正しいやり方と  
いうものがあって、それは美しく機能的であ  
る。みっともない持ち方は、機能的にも劣っ  
ている。箸なんか持てなくてもフォークとナ  
イフがある！その通り！しかし、箸がきちん  
と使えないでフォークとナイフが美しく使い  
こなせる日本人なんて、そうそういるもんじゃ  
ない。<sup>5)</sup>

また、箸の持ち方は鉛筆の持ち方にも通じてい  
て、筆圧や字形の整え方にも影響すると言われ  
ている。

このような現状認識のもとに、「まぜる・つま  
む・はさむ・支える・運ぶ・切る・ほぐす・はが  
す」などの機能をもつ箸を、私たちが正しく使え  
ているかどうかという実態を確かめておく必要が  
あると考えた。まず、足元から見直してみよう  
ということである。

この調査（対象は大学生50名）では、正しい持  
ち方を知っていて箸をうまく使いこなすことがで  
きる人は、62%。逆に正しい持ち方を知らないし  
うまく使いこなすことができない人は約14%いる  
という結果を得た。

本調査内容の検討会で、手先を使う作業経験が  
箸の使い方にも何らかの関係しているのではない  
かという仮説をもった。この点についても、調査  
の質問事項に盛り込んだ。その結果、小刀で鉛筆  
をけずる・洗濯物を手で洗う・手縫いをするなど  
の経験が多い人に箸がうまく使える人が多いとい  
うことが分かった。

以上を踏まえて、次のような結果のまとめを導  
き出している。

世の中には便利なものが増え、現代人は手  
を使う経験が少なくなっている。手の活  
動経験が少ないと、手の記憶として刻まれる  
ことも少ない。箸の持ち方一つをとってみて

も、それは自らの手の記憶になると言えるの  
ではないだろうか。日本の食文化「箸」の美  
を受け継ぎ、伝えていくのはわたしたちであ  
り、子どもたちでもある。そのためにはまず、  
大人が見本となる存在たるべきである。そう  
であるためにも、正しい箸の持ち方・使い方  
を知っておく必要がある。食文化を子どもた  
ちに伝えることで、人と人とがつながる。人  
が文化を伝える。そして、文化がつながって  
いく。（部分を抜粋）

#### イ 「箸とマナー」について

箸に関する歴史的側面は、「箸使い」のマナー  
にも及んでいる。中でも、好ましくないとされて  
いる、いわゆる「きらい箸」が30項目以上にもわ  
たることに驚いた。日本の食文化と箸とは、切っ  
ても切れない関係にある。それだけに、箸使いの  
マナーは、食卓を共にする人たちが食事をより楽  
しむための知恵として生まれ伝えられたのではな  
いかという共通認識をもった。

そうした「箸使いのマナー」であるが、私たち  
自身にその知識も意識もほとんどないということ  
に気づき、現在もこのようなマナーが一般的に実  
生活に生きていて実践されているのだろうか、そ  
れとも、言葉としてももう死語になりつつあるの  
だろうかという疑問が生まれた。もし、後者であ  
るとすれば、伝統的な文化の継承という点で、そ  
の状況に対しての判断が迫られることではないだ  
ろうか。また、マナーという点に着目すると、た  
とえば問題視されることの多い携帯電話の使用と  
も一脈通じるところがあるのではないか。

このような疑問をもち、「箸の使い方に関する  
アンケート」の実施を決めた。質問内容について  
は、前項と同様に、N、Mが原案を作成し、それ  
をもとにして全員で検討した。調査内容や結果な  
どは、分量を考慮し、ここに詳述するのを控える。  
因みに、主な質問内容は、

- 「嫌い箸」(30項目) について知っている  
かどうか実際の箸使いはどうか
- 普段の食事における箸の使用頻度
- 携帯電話の使い方に関するマナー意識に

ついて  
などである。

このような方向からの問いに対する回答を集計し、その結果を表に整理した。調査の内容からみて、先の「箸と手」に関する調査より少し対象の幅を広げることにした。そして、20～30歳台の計50名から回答を得ている。

まず、「嫌い箸」については＜表1＞（次頁参照）の通りである。

これを見ると、「嫌い箸」の個々の名前については、よく知られているのは「迷い箸・刺し箸・箸渡し」の3つにとどまる。やや知られているものを加えても11で全体の約37%にとどまっているということが分かる。しかし、実際の箸使いについては、「嫌い箸」と言われる箸使いは、ほとんどしていないという結果がでた。つまり、言葉としては確実に死語化しつつある。けれども、日常

表1 「箸」を使う作法として、好ましくない使い方を「嫌い箸」と言う。このことを知っているかどうか、また、その行為を普段どれくらい行っているか。

の行為としては、箸を使うという日々の食事を通して、知らず知らずのうちに、作法を身に付けてきたものと読み取ることができる。「嫌い箸」の中で唯一「よくしている」は、「直箸」（大量の料理を「取り箸」を使わずに自分の箸で取り上げる）で、これは、日常の食卓が人間関係に上下意識などの隔てのない場となっていることによると考えられる。箸使いの作法が食事を共にする他者に不快感を与えないようにしたいという心配りから生まれたものだとすれば、人間関係のありようによって、必ずしもこれらの作法が当を得たものとは言えなくなる。

ともあれ、先人たちは、箸の使い方一つにしても、他者に不快感を与えないようにする心づかいをしてきた。そして、それを次世代につないできたことをこの結果から読み取ることができた。

	呼び名	意 味	A	B
1	移り箸	あれこれとお菜ばかり続けて食べる。	×	◎
2	こじ箸	食器に盛った料理を上から食べないで、箸でかき回し、自分の好物だけを探り出す。	×	◎
3	迷い箸	どの料理を食べようかと迷い、料理の上をあちこちと箸を動かす。	◎	◎
4	握り箸	箸の機能を全く果たさない。ただ握るだけの初歩的な持ち方。 これは攻撃を意味することになる。	○	◎
5	持ち箸	箸を持ったままの手で、他の食器を持ち。	×	○
6	探り箸	食器の汁物などをかき混ぜて中身を探る。	×	○
7	空箸	箸を一度料理につけておきながら、食べないで箸を置く。	×	◎
8	受け箸	箸をもったままおかわりをする。	×	◎
9	刺し箸	料理に箸を突き刺して食べる。	◎	◎
10	涙 箸	箸の先から汁をポタポタ落とす。	×	◎
11	ねぶり箸	箸についたものを口でなめて取る。	○	◎
12	横 箸	日本の箸を揃えて、スプーンのようにして料理をすくいあげる。	×	◎
13	かき箸	食器のふちに口を当てて、料理を箸で口の中にかき込む。	△	○
14	込み箸	口にはおぼった物を箸で奥へ押し込む。	×	◎
15	かみ箸	箸の先を噛む。	○	◎
16	降り箸	箸先についた汁などを振り落とす。	×	◎
17	落とし箸	食事中に箸を床に落とす。	×	◎
18	洗い箸	食器の中で箸を洗う。	×	◎

19	直箸	大皿の料理を「取り箸」を使わずに、自分の箸で取り分ける。	○	△
20	すかし箸	骨のついた魚の上側を食べた後、魚をひっくり返さずに裏側の身をつついて食べる。	×	◎
21	寄せ箸	食器を箸で手前に引き寄せる。	○	◎
22	渡し箸	食事の途中で箸を食器の上に渡して置く。	×	◎
23	指し箸	食事中に箸で人を指す。	○	◎
24	くわえ箸	箸を置かず口にくわえたまま手で器を持つ。	○	◎
25	掻き箸	箸で頭を掻く。	×	◎
26	立て箸	仏箸と言われ、箸をご飯に立てること。	○	◎
27	拌み箸	両手で箸を挟み、拌むようにする。	×	◎
28	箸渡し	箸で挟み上げた料理を別の箸を取ったり、箸と箸で料理のやりとりをする。	◎	◎
29	二人箸	食器の上で二人一緒に同じ料理を挟む。	×	◎
30	違い箸	異質の箸、例えば木と竹の箸を一对にして使う。	×	◎

\* A：「嫌い箸」の呼び名について知っている、知らないに関わらず、その使い方がマナー違反だと知っているかどうか。

B：その行為を、普段どの程度行っているか。

a：していない b：ほとんどしていない c：時々している  
d：よくしている e：いつもしている

◎……A：知っている人数 - 知らない人数 = 20人以上

B：a + b - d + e = 20人以上

○……A：知っている人数 - 知らない人数 = 10人～19人

B：a + b - d + e = 10人～19人

△……A：知っている人数 - 知らない人数 = 0人～9人

B：a + b - d + e = 0人～9人

×……A：知っている人数 - 知らない人数 = 0人未満

B：a + b - d + e = 0人未満

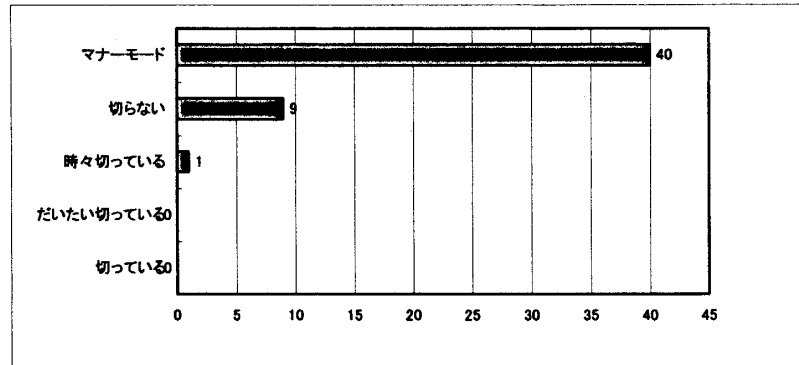
これらの行為が「嫌い箸」であるということを知らなくても、「嫌い箸」と言われる箸の使い方は、ほとんどしていないということがこの表から見ることができる。

一方、新しいメディアとして急速に普及してきた携帯電話の使い方について、そのマナー意識と使用状況を調べた結果は、＜グラフ①～③＞の通りである。

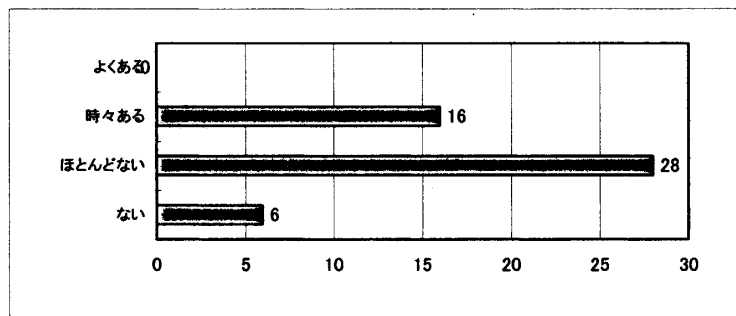
\* この他にも、幾つかの項目について結果をグラフに表している。以下には、その中から前記の内容に該当するもの3事項に関するものを抜き出して示す。



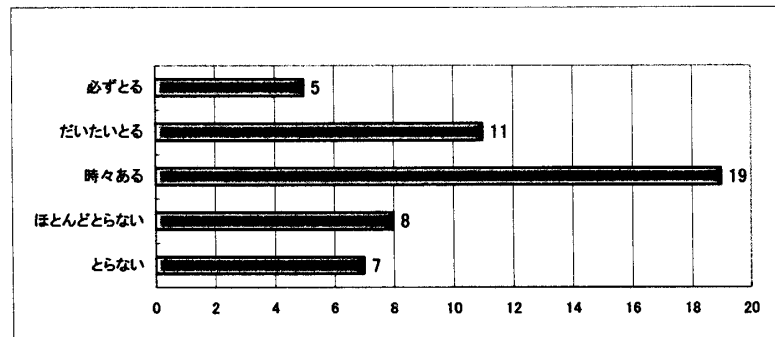
グラフ① 電車の中で携帯電話の電源はどうしているか



グラフ② 電車の中で電話をかけることがあるか



グラフ③ 電車の中で電話がかかってきたらとるか



たとえば、電車の車内放送で「車中では携帯電話の電源を切るように」という注意が促されている。それにもかかわらず、マナーモードにしてあるからという理由で、電源を切らない人がかなりいる。また、「電車の中でメールをすることがあるか」という問いには、58%が「よくある」と答えている。意識のうえでも、次の＜表2＞にあるように、メールにはあまり自制心が働かないようである。

以上の結果を踏まえて、次のように報告をまとめている。（まとめの一部分を抜粋して示す）

たくさんの新しい文化が身近になることによって、日本らしい美しい身のこなし方への意識が薄れてきているように感じる。それはすなわち、対人意識の薄れにもつながるのではないだろうか。「箸」の使い方のような日本古来の文化を受け継いでいくのは私たちであるし、新しいものに対してマナーをつくり伝えていくのも、私たち一人一人の身のこなし方次第であるとも考える。

この実態調査はごく限られた範囲の小規模なものにとどまったものではあるが、「箸」

表2 「携帯電話・PHSの自己と他者の使い方」

	質問事項	はい	いいえ
1	A：電車の中で電源をつけていても良いと思いますか？	64	36
2	A：電車の中で通話していても良いと思いますか？	14	86
	B：電車の中で通話しているのは気になりますか？	88	12
3	A：電車の中でメールをしても良いとおもいますか？	78	22
	B：電車の中でメールをしているのは気になりますか？	14	86
4	A：授業中、通話しても良いと思いますか？	2	98
	B：授業中、通話しているのは気になりますか？	88	12
5	A：授業中、メールをしても良いと思いますか？	44	56
	B：授業中、メールをしているのは気になりますか？	24	76

(%)

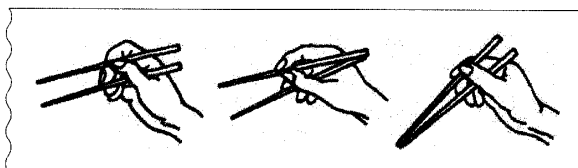
の使い方及びマナー意識の実態に迫ることができた。この調査結果に基づく話し合いを通して、こうした文化を受け継ぐのも、伝えるのも、また作り出すのも、私たち自身であるという感を強くした。そして、それは、相手や対象があってこそ、言葉を換えれば、人や物とのより良いかかわりをつくるということのためにこそ意味があるということに他ならないという認識にたどり着くことができた。

### (3) まとめ

「箸」という日常の生活に欠くことのできない道具をめぐって、4側面からのアプローチを試みた。それぞれの追求活動過程で、たとえば、飲食店で出された割り箸の袋に、英語で箸の使い方の説明が印刷されているものをみつけてきて、みんなで読み、「この説明で、初めて使う人に分かるだろうか」などと話題にしたこと（資料①参照）。

#### 資料① 割り箸の袋-HOW TO USE CHOPSTICKS-

1. One of the two chopsticks is 'cradled' between the thumb and second finger.  
2. The other chopstick is held by the tips of the thumb and first finger and is movable. After a little practice, you will be able to determine the best position for you.



ナンテンの枝を削って、実際に箸を作ってみたこと。箸の専門店を訪問するなど、実体験の場をもつことも心がけ実行してきた。そして、それらを当初のねらいに基づいて総合し、そこから導き出せるものは何かを見極める段階に進んだ。時間的な制約のある中で、それぞれが十分な検討を経たものとして出し合うまでには至っていないものの、当初指定した4つの側面から追求してきたことを繋ぎ合わせ、総合して見えてきたものを次の5点にまとめている。

- ① 箸は日本文化と他文化をつなぐ
- ② 箸は木の命と人の命をつなぐ
- ③ 箸は神（あるいはあの世）と人とをつなぐ
- ④ 箸は食物としていただく命と人の命をつなぐ
- ⑤ 箸に関するマナーを通して人と人をつなぐ

このプロジェクト研究を通して、ようやく「箸には、『つなぐ』という力が潜んでいる」という仮説の確かめにたどり着くことができた。

ところで、箸づくりに携わる市原平兵衛氏を「日本のたくみ」の一人として紹介している白洲正子氏が、市原氏に箸作りの名人について訊ねてみたところ、「杉で三人、竹で二人」と明確な答えが返ってきたそうである。このときのことを、白洲氏は、次のように記している。

そういう人に会ってみたいという、これはきっぱりと断られた。山の人々は素朴だか

ら、話をすることもできないし、仕事場へ人を入れることも嫌う。仕事に失敗は許されないからで、そういう所を他人に見せるのは、気の毒でならないのだといわれた。<sup>6)</sup>

箸は、衛生面はもちろん、料理を口に運ぶときの感触までも考慮して作られている。そんな白洲氏の文章との出会いによって、一膳の箸に魂を込めて作る人の存在を知り、箸を作る人と使う人のつながりに、改めて思いをつなぐことができた。

#### 4 本実践で確かめられたこと

「箸プロジェクト研究」は、これまで述べてきた通り、総合学習的展開を意図して取り組んだものである。この意図に照らしてみた場合、本実践を通して明らかにすることができたのは何か。それを次の2点にしぼって述べ、まとめとする。

##### ① 総合学習的展開で発見し生み出したもの

総合学習の要件として措定した3事項に照らして設定したテーマ「箸」の追求過程は、既に述べてきた通りである。そこでは、メンバーの個々の発想が他者の支えによって追求され、さらに、それらを組み合わせることで、「箸はつなぐ」ものという発見を得ることができた。そして、箸の文化をその精神までも継承し伝える役割を自分たちが担っているのだという、箸に対する見方と実践意欲は、それまでには持ち合わせていなかったものであり、まさに、協同活動によってこそ見出すことができたものとみることができる。総合学習の過程では、様々な他者とのかかわりを求める場が必然的に生まれる。そこにコミュニケーション活動の活性化が図られる。また、共通のテーマ追求に取り組み、そこに学びの共同体が形成されていったことは言うまでもない。

この点について、佐伯胖氏は、学ぶということの営みについて、次のように意味付けている。

学習ということはまさに、「より広い世界へ向けて、より根元的なところに立ち返りつつ、文化における意味世界の吟味、享受、再構築の共同実践に参加していくこと」には

かならない。

ここであえて「参加」という言葉を使うのは、それがきわめて個人的な「自分探し」のいとなみでありながら、同時にきわめて社会的な、人びととの共同的ないとなみに、自らのユニークな「自分らしさ」を活かしながら、「加わっていく」いとなみだ、という点を強調したかったからである。<sup>7)</sup>

本実践で、氏の言葉にある「学び」を一人一人が体験することができたと言えるのではないだろうか。

##### ② 問題意識を拓くために

自分の追求課題を持つことは、とりもなおさず、生活に積極性をもつことにつながる。人、物、ことに主体的にかかわっていかうとするからである。そのきっかけは、人によって様々であろうが、それが、日常生活に密着した「箸」という道具のようなものへの着目からでも十分であるということを示すことができたと考える。

#### 5 今後の課題

本実践は、大学の専攻科生を対象にしたものである。時間的にもごく限られていて、相互交流もままならない状況の中で、とりあえずまとまりをつけたという感否めない。しかし、少なくとも、この学習体験は、まとめの段階に至って、学者が自らの「学び方」を改めて意識化することの好機となった。これは、本実践で「ジグソーパズルの展開」をとったこと、換言すれば、メンバー全員「知の総合化」を図ることによってこそ、実現できたといってよいのではないかと考える。

このような学習のあり方は、他の科目での問題解決にも生かすことができそうである。

また、小学校段階に経験させておきたい学習、とりわけ、総合学習に有効ではないかと考える。この点については、実際に場を小学校に移して、先生方の協力を得て検証してみたいと考えている。

注

- 1) 拙論文「総合的な学習につながる国語科授業の検討 (I)」『教育専攻科紀要』第4号 神戸親和女子大学 平成11年6月 p.41
- 2) 石垣りん『石垣りん詩集』思潮社 1971.12 p.77
- 3) 一例を挙げるとすれば、朝日新聞2001年9月22日付 「くらし」欄に次の見出しで掲載された記事がある。  
「間伐材生かそう 温暖化防ぎ 森はぐくむ」「割りばし・魚礁、用途多様に」
- 4) この考察は、出原佳奈さんが本論文に寄せて改めて書き起こしたものである。
- 5) 小玉節郎「箸の上げ下ろし」『サンデー毎日』2001年10月7日号

6) 白洲正子『日本のたくみ』新潮社 昭和59年12月 pp.182～183

7) 佐伯胖 勝田英典 佐藤学 編『学びへの誘い』東京大学出版会 1995.7 pp.30～31

<その他の主要参考文献>

- ・ 一色八郎『箸の文化史』御茶の水書房 1990.12

付記；発表用に作成した全資料プリントは、冊子にしている。その原稿は、

- ・ 出原佳奈・小倉琴子・塚原法子・戸田多佳子
- ・ 巻田佳織（五十音順）

の五名で作成した。